

D-3 児童学における実践研究法の研究(1) — 参加観察法について —
立正女大家政 佐藤啓子

目的 実践研究法としての参加観察法の特徴を、児童の集団指導場面における参加観察者としての体験事例をもちに、関係弁証法の立場から明らかにする。

特色 (1)参加観察法とは、観察者が、自発的にもしくは役割を付与されて、場面活動に参加して行われる実践研究法である。

(2)研究方法 (a)内観法、b参加観察法、c行爲法、d観察法、e実験法)間の

関係: ①研究者、研究対象、研究結果の関係 — 図I — ②状況の発展 (研究結果の効果) — 図II —

(3)参加観察法の実践は、接在共存活動 (行爲法) の展開によつて促進される。

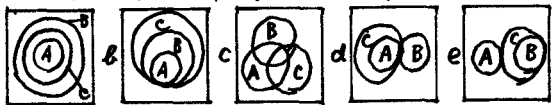
(4)参加観察法の実践は、実践活動の推進と理論化 (体系化) を同時的に展開させる。

(5)参加観察法の結果は、観察場面に動的に生かされて、参加者に共有される。

(6)参加観察者の場面へのかわり方 (ex. 内在的、内接的、接在的、外接的、外在的参加観察) に対応して場面状況の発展がもたされる。

(7)接在共存状況のリーダーは、参加観察者への役割付与によつて、この活動を充実させることができる。

(8)参加観察法は、観察者自身の人格変容、指導者養成に貢献する (共同研究者: 松村康平)



図I 注 A:研究者 B:研究対象 C:研究結果



図II 注 S:状況 P:人 O:場 R:結果